

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 13 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02431

研究課題名（和文）批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育の融合をめざす実践的研究

研究課題名（英文）Practical Research Toward Integrating Critical Discourse Studies and Education for Democratic Citizenship

研究代表者

名嶋 義直（NAJMA, Yoshinao）

琉球大学・グローバル教育支援機構・教授

研究者番号：60359552

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：最終目標である民主的シティズンシップ教育教材を刊行した。刊行後、民主的シティズンシップについて理解を深めたり実際に教材の使い方などを考えたりするオンラインイベントを複数回行った。そのほか国内外各機関において、批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育とを融合させたワークショップや講座で講師を担当した。また複数の大学で特別講義や集中講義を行った。台北・香港では国際シンポジウムで発表も行った。論文掲載は書評も含め2本、掲載は4月となったが学際的な学術雑誌に沖縄の地方新聞の記事をデータとした論文も執筆した。以上が批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合についての研究成果とその還元である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

民主的シティズンシップを育てる教材を出版することによって、教育において活用できるリソースを提供することができた。それによって民主的シティズンシップ教育に取り組み方の例を示すことができた。また、批判的談話研究と民主的シティズンシップとの融合を目指した実践的研究と教育実践をテーマとした講演・ワークショップ・特別授業・集中講義などを行った。それらの研究成果の還元によって、研究や教育に関わる人々に意識面でも変化や影響を生み出すことができた。つまり本研究成果は、物的リソースの提供だけではなく、心的リソースの提供も行った。これが本研究成果の研究成果の学術的意義や社会的意義である。

研究成果の概要（英文）：Democratic citizenship education materials were published. After the publication, we held several online events to deepen understanding of democratic citizenship and to discuss how to use the materials in practice. In addition, he has taught workshops and courses integrating critical discourse research and democratic citizenship education at various institutions in Japan and abroad. He has also given special lectures and intensive courses at several universities. He has also presented at international symposiums in Taipei and Hong Kong. I have published two articles, including a book review, in interdisciplinary journals, including one in April, which used data from an article in a local Okinawan newspaper. These are the results of his research on the integration of critical discourse research and democratic citizenship education.

Translated with DeepL.com (free version)

研究分野：批判的談話研究

キーワード：批判的談話研究 民主的シティズンシップ教育 批判的リテラシー 多様性 寛容さ

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究者としての責務

社会の発展には「課題解決」が必要である。その課題解決に取り組むのが研究者の責務である。では今の社会にどのような課題があるか。申請者は沖縄で生活し沖縄の大学で研究と教育に従事している。沖縄の社会には歴史的な経緯もあって多くの社会問題が存在する。そしてそれらは日本社会ともつながり沖縄ローカルの問題ではなく日本全体のグローバルな問題となっている。それらの課題解決に取り組むことこそが沖縄に拠点をおく研究者としての責務であると考えた。

(2) 本研究の学術的背景：批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育の実践

批判的談話研究 (Critical Discourse Studies; CDS)

申請者は 2011 年の東日本大震災と福島第一原発事故を契機に、批判的談話研究 (Critical Discourse Studies; 以下 CDS) を専門とするようになった。CDS は、弱者の立場に立って社会問題に目を向け、「力を持っている人や集団」が「力を持っていない人たち」を、「談話・言説を通して」どのようにしてコントロールしたり、自分たちの力を強化したり再生産したりしているかを、談話や言説の分析を通して可視化し、社会問題の解決に研究者自身も取り組んでいく「学問的姿勢」をいう。申請者はこれまで CDS を実践し書籍や雑誌論文の公刊、口頭発表や講演を通して社会発信してきた。2013 年～2015 年度、2016 年～2018 年度には CDS 研究で競争的資金(科研費課題番号 25580084、16K13218) を獲得している。これまでは分析対象として全国紙の新聞記事を扱うことが多かったが、2016 年度に現所属先に異動後、地域貢献や地域で活躍する人材の教育を考えたとき、地域に対する批判的リテラシーの涵養の必要があると考えようになった。そこで今回申請する研究では地方新聞記事を分析する。新聞記事を分析しても直接的な問題解決には至らないが、それらの研究成果を公開することで人々の批判的リテラシーを涵養し、将来に生じうる社会問題の予防につながる思考力を高めることができると考えた。

民主的シティズンシップ教育 (Education for Democratic Citizenship; EDC)

CDS の実践を通してドイツの研究者と交流する機会がありドイツや欧州評議会では民主的シティズンシップ教育 (Education for Democratic Citizenship; 以下、EDC) が民主主義の理念を備えた市民の育成のために重要視されておりそこでは CDS も重要な役割を果たしているということを知った。EDC とは簡単に言うと「対話や議論といった民主的な方法で社会と主体的に関わり、社会実践を行っていく市民に求められる素養」である。類似したものに主権者教育がある。主権者教育は「国家にとって良き国民」を育てる教育であるが、EDC は国家や国籍や主権者という狭義の政治的枠組みを超えて「コミュニティに主体的に関わる市民」を育てるものである。グローバル化の進展する日本で今求められているのは EDC である。民主的シティズンシップを育てることで人々の主体的な社会参加意識や実践をエンパワメントできると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、上記背景 の批判的談話研究 (CDS) と上記背景 の民主的シティズンシップ教育 (EDC) とを融合させることを目指す。それによって批判的リテラシーと社会参加への主体性や実践力を併せ持つ人を育てることが可能になるからである。そのような実践的研究を本補助

事業の目的とした。当初は沖縄県における地方紙の CDS と EDC とを掛け合わせた「研究と教育との融合」のあり方を研究し実践することを考えていたが、沖縄をめぐる問題は日本全体の問題であることも多いため、批判的談話研究の実践としては沖縄の地方新聞の分析だけではなく広く全国紙の記事も分析対象とすることとした。申請者にはすでに CDS の研究実績や EDC の理念を広める活動の実績があるが、本事業ではそれぞれを弁証法的に発展させ、一段階高次の研究・教育実践に昇華させる。研究成果を研究の中だけに留めず、教育への応用可能性に言及だけして終わるのではなく、研究を実践しその研究成果をいかに教育に応用するかを研究し自分自身の教育現場で実践する。その全てのサイクルを 1 つの包括的研究として連関させる。研究と教育とを別々に行うのではなく融合させた 1 つの課題として取り組む。研究が教育を発展させ、教育が研究を発展させる。お互いの成果がお互いを進展させる。そのような相乗効果を生み出すことが本研究の目的でもある。

3. 研究の方法

CDS の教育における有益性を明らかにする（2020 年度）

本研究では「CDS の有益性」と「CDS の教育における有益性」を明らかにしたい。まず沖縄をめぐる社会問題に目を向け、地元地方紙の記事を CDS の姿勢で分析する。そして沖縄をめぐる言説の中にどのような「力を持った人や集団」があり、誰がどのような意図で沖縄の社会における弱者を支配し誘導しようとしているのかを可視化する。地方紙の言説が持つ支配性を可視化し、全国紙のそれと比較してその共通性と独自性を明らかにすることで「CDS の有益性」を主張する。言説分析を通して沖縄社会の複雑さの一端を明らかにする本研究成果は、それ単独でも沖縄社会の研究として有意義であるが、沖縄社会を主体的に生きる市民にとって批判的リテラシーを涵養するという点でも大きな意義がある。そこでその研究成果を大学教育に応用・展開する。日本においては CDS 自体その取り組みは決して多くなく、CDS を教育に応用するという視点を最初から組み込んで行われている CDS はさらに少ない。本研究では CDS の成果を EDC に活用できることを実証し、批判的リテラシーを涵養する地域人材の教育を通して地域貢献につなげたい。

EDC の有益性を明らかにする（2020 年度～2022 年度）

グローバル化が進み多様な価値観や理念が存在する社会において、その社会を生きる人に向けた教育として EDC が有益であり、そのための教材が求められることを明らかにする。大学授業の中に EDC の理念や方法論を取り込むことで民主的な方法で市民性を育てる教育を展開させていくことが可能であること、その取り組みにおいて CDS が効果的に活用できることを論じるテーマとし、試行的授業や教材案の試用を実施し、受講生からは適宜フィードバックを得て、それらをデータとして収集して分析・考察し、そこで得られた知見を次の実践に活かし、最終的に実践研究としてまとめる。そこから大学教育、特に語学教育や言語学教育の中でいかにして CDS と EDC を実践するかについての有益な知見をワークショップや授業形態の提案などを通して提供したい。申請者の教育実践の場は沖縄県内の大学であり、大学生は沖縄社会の構成員である。したがってこの授業実践研究自体に沖縄社会における研究成果の地域への還元という意義も存在する。なお当初の計画では 2020 年度～2022 年度にかけてドイツに渡航して調査や学校視察を行う予定であったが Covid 19 の世界的感染拡大により不可能となった。そのため、当初の計画以上に国内において、CDS や EDC に関する資料収集・現地視察・研究教育実践成果の発信に注力し、CDS や EDC 実践を行い、論文や口頭発表・講演などに積極的に取り組み、研究

成果の発信を多面的に行うこととした。

民主的シティズンシップ教育（EDC）教材出版（2023年度）

批判的談話研究（CDS）の視点を組み込んだ民主的シティズンシップ教育（EDC）を効果的に行うためには教師の資質はもちろんのこと、教材の質も重要な条件となる。そこで本研究では最終的な研究成果物として、批判的談話研究（CDS）の成果を組み込んだ民主的シティズンシップ教育（EDC）の教材を作成し、誰でも活用できるよう出版物として刊行する。出版作業と並行して、書籍の内容をさらに豊かにするため、雑誌論文・口頭発表などの募集や講演講師・他大学での講座などの依頼を積極的に活用し、思索とフィードバックを連関させて研究や教育実践を深める。2023年11月末に書籍を刊行することができたので、残りの補助事業期間を有効に活用するため、本書籍を紹介するオンラインイベントやワークショップなどを積極的に計画し実施した。

4. 研究成果

研究成果は口頭発表・論文・書籍などで公表した。内容を大きく分けると、以下の（1）から（3）に分けられる。順番は逆になるが、本研究の最終的な目標は（3）「批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合を目指す研究教育実践」である。その目標達成の過程で必須となる研究が、（1）批判的談話研究の研究であり、（2）民主的シティズンシップ教育の実践研究である。この（1）と（2）とを土台として、（3）の目標へと研究や実践を融合させていくことができるのである。

（1）批判的談話研究についての実績

（2）民主的シティズンシップ教育についての実績

（3）批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合を目指す研究教育実践についての実績

それらの（1）から（3）は、どのような対象に向けて発信されたかという点において、その大分類の中でさらにいくつかの小分類に分けられる。その小分類と上記の大分類とを組み合わせたものが次ページの表である。（1）批判的談話研究について、と（2）民主的シティズンシップ教育について、では「何と関わるのか」という点で小分類を行っているが、（3）批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合、という大分類においては、研究成果の内容そのものが批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合となっている点はもちろんのことであるが、市民社会のさまざまな「市民」を意識した研究成果の発信となっており、その「研究成果の還元」という面においても、研究・研究者と一般市民との融合という特徴も持っている。そこで、（3）批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合、という大分類においては、「誰を対象にして研究成果を発信したか」という観点から小分類を立てた。そこには本研究の重要なテーマの1つであった「沖縄」も含まれている点を確認しておく。

表：研究成果の大分類とそれぞれの大分類の中の小分類

研究成果の大分類	それぞれの大分類における小分類
(1) 批判的談話研究 について	(a) 批判的談話研究そのもの
	(b) 批判的談話研究とリテラシー
(2) 民主的シティズンシップ教育について	(a) 民主的シティズンシップ教育そのもの
	(b) 民主的シティズンシップ教育と東アジアの研究者
	(c) 民主的シティズンシップ教育と日本語教育
	(d) 民主的シティズンシップ教育と新しい教育
	(e) 民主的シティズンシップ教育の教材
(3) 批判的談話研究 と民主的シティズンシ ップ教育との融合を目 指す研究教育実践につ いて	(a) 研究者に向けた民主的シティズンシップ教育論
	(b) 教育関係に向けた民主的シティズンシップ教育論
	(c) 学生に向けた民主的シティズンシップ教育論
	(d) 「沖縄」に関する平和運動に向けた民主的シティズンシップ教育論
	(e) より広い一般市民に向けた民主的シティズンシップ教育論

個別の研究業績の種別・発表年・題目・書誌情報等については、すでに各年度毎の実績報告において報告済みであり、別途確認可能であることから、本報告様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通) においては個々の研究業績の概要説明は割愛するが、小分類の観点から大分類 (1) (2) (3) の相互の関連性について簡単に注釈する。(1) の (b) は批判的談話研究が批判的リテラシーの肝要に有益であるということを論じた研究である。その批判的リテラシーは民主的シティズンシップにおいて重要な資質の1つとして考えられる。つまり (1) の (b) の研究は大分類 (2) の民主的シティズンシップ教育についての研究と (1) 批判的談話研究についての研究との間を架橋するものである。同じように、(2) の (b) は (3) の (a) につながり、(2) の (c) も (3) の (b)(c) につながり、(2) の (d) は、局所的なテーマに思われるかもしれないが「沖縄の問題は日本全体の問題」であるので、(3) の (b)(c) だけではなく (3) の (d) にも繋がっていく。そして (2) の (e) は (3) の (e) につながる。

以上のような関連性は、本科研費研究の研究成果群の中においても「批判的談話研究と民主的シティズンシップ教育との融合」が存在しており、その内部における有機的結合から見て、本科研費研究の研究目標が一定の程度で達成されていることの一つの証左であると考えられるであろう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 7件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 市民性教育としての留学生授業 SDGs 4 質の高い教育をみんなに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年中國文化大學日本語文學系主催国際学術シンポジウム会議論文集	6. 最初と最後の頁 118-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 41
2. 論文標題 語用論から批判的談話研究へ 日常言語の分析を通して談話主体の持つ権力性・政治性を可視化する社会的実践	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語学	6. 最初と最後の頁 96-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 302
2. 論文標題 「『 に寄り添う』と語ること」に隠された権力性」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『 SYNODOS』	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 民主的シティズンシップ教育のローカライズを考える 「対話」を積み上げるための「異論」「複数性」「政治性」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 稲垣みどり他編著『共生社会のためのことばの教育』	6. 最初と最後の頁 199-239
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 メディアリテラシーから見たことばの問題	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 庵功雄 編著 『「日本人の日本語」を考える プレイン・ランゲージをめぐって』 丸善出版	6. 最初と最後の頁 224-243
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 市民性教育としての留学生授業 SGD4 質の高い教育をみんなに	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 2022年中国文化大学国際・外国語文学部日本語文学科国際学術シンポジウム論文集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 教師と学習者が共に学び共に民主的シティズンシップを育てる教材を目指してTeaching Materials for Teachers and Learners to Study Together and Develop Democratic Citizenship	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (16th EAJS International Conference 2020)	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Yoshinao Najma	4. 巻 なし
2. 論文標題 ことば「だけ」の教育から「民主的なシティズンシップ」の教育へ From Japanese LANGUAGE Education to Education for DEMOCRATIC CITIZENSHIP	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 The proceedings of the JLESA'18-19 conference	6. 最初と最後の頁 94-133
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 21
2. 論文標題 研究者の社会的役割についてー民主的シティズンシップ教育における批判的談話研究の活用ー	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語用論研究	6. 最初と最後の頁 38-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 5-20
2. 論文標題 社会のパラダイムシフトと新しい学習・教育 民主的シティズンシップ教育の可能性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 5-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 持続可能な学びの獲得を目指した日本語教育ー日本語教育副専攻科目と上級留学生科目との共修ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中國文化大學日本語文學系國際學術検討会ーSDGsの目標からみた日本語教育と日本研究のダイバーシティー予稿集	6. 最初と最後の頁 156-163
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 3595
2. 論文標題 書評 「恥知らずの常態化」や「恐怖をあおる政治」に「省察による減速」で対抗する	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 図書新聞	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 なし
2. 論文標題 ポストコロナ時代の学びを支援する授業形態についての一考察ー授業録画活用の提案ー	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中東・北アフリカ日本語教育 JLEMENA2022	6. 最初と最後の頁 65-83
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 名嶋義直	4. 巻 59
2. 論文標題 「沖縄」から発信する平和研究の可能性ーなにをどう発信するのか、なぜ沖縄から発信するのか	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 日本の科学者	6. 最初と最後の頁 18-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計22件 (うち招待講演 14件 / うち国際学会 12件)

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 市民性教育としての留学生授業 SDGs 4 質の高い教育をみんなに
3. 学会等名 2022年中國文化大學日本語文學系主催国際学術シンポジウム (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 日本語教育実習の実践例から考える「自立」と「自律」 ドイツにおける「政治教育」(民主的シティズンシップ教育)のローカライズの試み
3. 学会等名 JLEMENA2022 (中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム) (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 会話という相互行為について考えるワークショップ 私たちは会話するときにどういう行動をとっているのか
3. 学会等名 2022年度山口県立大学国際文化学部国際文化学科主催「日本語教育関連講演会」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 民主的シティズンシップを育てる「対話」とそれを支える批判的思考
3. 学会等名 凡人社オンライン日本語サロン研修会(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 「民主的シティズンシップ教育を実践する」
3. 学会等名 全4回連続講座講師 大阪YMCA日本語教育センター日本語教師のためのじっくり学ぶ講座(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 セミナー「民主的シティズンシップ」を育てる「対話」とそれを支える「批判的思考」
3. 学会等名 アレッセ高岡主催 市民性教育講座「実践していますか? -批判的思考、対話、多様性-」(招待講演)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 ワークショップ「民主的シティズンシップ」を育てる「対話」とそれを支える「批判的思考」
3. 学会等名 アレッセ高岡主催 市民性教育講座「実践していますか？ー批判的思考、対話、多様性ー」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 地域日本語教室における協働ー対話を積み上げ、市民性を育てるー
3. 学会等名 公益財団法人 とよなか国際交流協会 2022年度日本語ボランティア養成講座（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 平和教育の批判的検討と「民主的シティズンシップ教育」からの捉え直し 「戦争」の対極としての「平和」から「共生」がもたらす『平和』へ
3. 学会等名 日本シティズンシップ教育学会 第3回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 会話分析・談話分析の日本語教育への応用
3. 学会等名 シンポジウム 卒業後のキャリアに向けた学士課程の言語教育（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 教師と学習者が共に学び共に民主的シティズンシップを育てる教材を目指してTeaching Materials for Teachers and Learners to Study Together and Develop Democratic Citizenship
3. 学会等名 第24回ヨーロッパ日本語教育シンポジウム (16th EAJS International Conference 2020) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 ポストコロナ時代の学びを支援する授業形態についての一考察ー授業録画活用の提案ー
3. 学会等名 JLEMENA2022 (中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 特別ワークショップ2「自分で文法を見つけてみようー自動詞・他動詞編ー」
3. 学会等名 JLEMENA2022 (中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 特別ワークショップ3「特別ワークショップ3『会話の文法』を探してみようー会話のマクロ構造編ー」
3. 学会等名 JLEMENA2022 (中東・北アフリカ日本語教育シンポジウム) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 「排除の言説」から「共生の対話」へー東アジア若手研究者の役割ー
3. 学会等名 東アジア若手研究者合同フォーラム（幹事校：筑波大学）（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 「対話」から育む「市民性」ー異論、複数性、政治性をヒントにー
3. 学会等名 大阪YMCA日本語教育センター1周年記念セミナー（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 民主的シティズンシップ教育を実践してみませんか
3. 学会等名 大阪YMCA日本語教育センター（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 市民性教育としての留学生授業 SGD4 質の高い教育をみんなに
3. 学会等名 2022年中国文化大学国際・外国語文学部日本語文学科国際学術シンポジウム（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 批判的読解
3. 学会等名 JLESA 特別フォーラム 第21回（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 教師と学習者が共に学び共に民主的シティズンシップを育てる教材を目指して
3. 学会等名 Association of Japanese Language Teachers in Europe e.V.（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 持続可能な学びの獲得を目指した日本語教育－日本語教育副専攻科目と上級留学生科目との共修－
3. 学会等名 2023年中國文化大學日本語文學系國際學術檢討会（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 名嶋義直
2. 発表標題 日本語教育から民主的シティズンシップ 教育へ－社会的行為者の視点から－
3. 学会等名 第13回国際日本語教育・日本研究シンポジウム 香港（国際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 名嶋義直（編）、太田奈名子・韓娥凜・村上智里・義永美央子・林良子・野呂香代子・西田光一（著）	4. 発行年 2021年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 354
3. 書名 リスクコミュニケーション 排除の言説から共生の対話へ	

1. 著者名 名嶋義直（編）、寺川直樹・田中俊亮・竹村修文・後藤玲子・今村和宏・志田陽子・佐藤友則・古閑涼二（著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 273
3. 書名 10代からの批判的思考 社会を変える9つのヒント	

1. 著者名 名嶋義直・神田靖子（編）、近藤孝弘・中川慎二・寺田佳孝・三輪聖・野呂香代子・渡邊紗代・西山暁義・木部尚志・木戸衛一（著）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 445
3. 書名 右翼ポピュリズムに抗する民主主義教育 - ドイツの政治教育に学ぶ	

1. 著者名 名嶋義直・野呂香代子・三輪聖	4. 発行年 2023年
2. 出版社 凡人社	5. 総ページ数 206
3. 書名 対話を通して学ぶ「社会」と「ことば」 日本語×民主的シティズンシップ 深く、広くじっくり考える20のトピック	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
ドイツ	ベルリン自由大学	テュービンゲン大学	